

真・恋姫†夢想 天に対
する地の救世主

シバヤ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

三国志で司馬一族、中でも司馬昭が好きなので主人公の作品を書いてみました
一刀は魏に所属します

※不定期更新予定です

目次

其ノ壺	1
其ノ弐	11
其ノ参	19
其ノ四	34
其ノ五	42
其ノ六	55
其ノ七	62
其ノ八	73

其ノ壺

河内郡温県孝敬里。そこは都・洛陽から少し離れた所だ

都から少し離れたといつても別に豊かであるとかそういうわけじゃない

その街に俺は家族と幼なじみと住んでいる

そしてそこから少し離れた森の中のとある一部に草が寝つ転がっても問題ないくらい茂っている

そこに寝るのが俺の憩いの時間だ

俺は司馬子上、真名は総雅^{そうが}。歳はまだ両の手で数えられるほどだ

この国には姓、名、字の他に真名と許したものしか呼んではいけない名前がある
俺で例えると姓は司馬、名は昭、字は子上で真名が総雅となる

「は……なんかいろいろとめんどくせえ」

さつきまで母上の元で学問を学び、それが終わったら父上の元で剣術の鍛錬だ

正直、そんなことやっただってなんにも意味がないと思う

何故かと言うと、俺にはなんでもできる完璧な姉上がいる

姉上は天才で、一度聞けばそれは覚えられ、一度見ればそれができる

例え学問だろうが剣術だろうが果ては料理から音楽といったことまでな

完璧な姉持っているが故に何事もやる気が起きずめんどくさがりになってしまった
ここで寝てても別に誰も困ることはないし、寝てしまおうか――

「総雅くん」

「……優奈か」

この子は王元姫。真名は優奈ゆうな

俺の幼なじみで一緒に暮らしている

なんで一緒に暮らしているかというところ、彼女の両親は都で働いていてな
それで一人でいさせるよりってことでうちで暮らすことになった

「そろそろ時間だよ？」

「わかってる。けどめんどくせえ」

「そんなこと言って。鍛錬はやらないと」

「別に俺が強くならなかつたって姉上がいるだろ」

「めんどくさがってやらなかつたって報告するよ？」

「……まさか母上にもか？」

「もちろん。苺歌まいかさんには報告しなきゃ」

「わーっ。行くから言うのはなしだ」

母上に怒られるなんてそれ以上に怖いものなんてないと思う

姉上は怒るっていつても優しく怒るし、父上は強制しないからと見逃してくれると思
う

けど母上だけはダメだ。まさに蛇に睨まれた蛙になる

または獲物を狙う狼に睨まれてるって例えだな

優奈と森から戻り、屋敷の稽古場に行く

うちはそれなりに大きい屋敷に住んでいる

俺たち司馬一族は元々は都で暮らしてて母上が都で帝の側仕えとして、学問を教えて
たりもしてた

俺もその時に霊帝とその妹と友だちになったんだ

それで母上が仕事を引退して、こっちに来たわけ

「いいのかい？別に毎日じゃなくても僕は構わないんだけど」

「いえ、やります」

俺の父上、張春華。真名は白兜びやくと

劍術に關しては敵無しと言われるほどであの江東の虎、孫堅と互角に戦い氣に入られ、真名をお互い預けあつたという話も聞いたことある

他には西涼の馬騰と酒の付き合いをする仲とか

俺と姉上の劍の師であり、俺がまず超える目標だ

「じゃあ準備ができたらいつでもかかつてきなさい」

「スウー……ハア……せえええええい!!」

深呼吸して、氣持ちを切り替えて一氣に攻め込む。けれど――

「動作が大きい。それじゃ隙だらけ」

「痛てえ!」

素早く、一撃を打ち込もうとしたけど軽々避けられ逆に打ち込まられる

姉上ならこんなことにならず、対等に打ち合ってるだろう……

いや、鍛錬だろうと勝負中はそのこと以外は考えてはいけない

まずは父上から一本取れることだけを!

「ありがとうございます……」

「それじゃ僕は先に戻ってるからね」

「はい……」

一本どころか一撃を入れることすら無理だった

大人が相手でも倒せれるぐらいには戦えるけど、西涼の馬騰や江東の孫堅と同等かそれ以上の力を持つ父上には遠すぎて全く歯が立たない

「お疲れさま。ご飯できてるけど食べられる？」

「ああ、大丈夫だ。どうかそういうのは侍女の方に任せればいいだろう？」

「料理はわたしが好きでやつてることだから。……それに総雅くんに手料理食べてもらいたいし」

「優奈が好きでやつてるならいいさ。じゃあ行こう」

俺と優奈は幼なじみであり、恋仲でもある

成人すればそのまま俺に嫁ぐことになっているが、その時もまだ俺は半人前だと思っただから正式に優奈が嫁ぐのは俺が一人前になってから

「そーうくん」

「ぐえっ……あ、姉上。いきなり飛びつかないでください」

「総くん見かけちゃったからついね」

司馬子元、真名は彩歌^{さいか}。俺の三つ上の姉だ

なんでもこなせ、出来ないことなんてない完璧な存在だ

まだ剣に関して父上の方が強いが、時間の問題だと思う

姉上は自身の存在に誇りを持っているから真名は本当に心の底から許した人じゃないと預けなく、姉上の真名を呼べるのは俺たち司馬一族を除けば優奈とその両親だけ

もし無許可で言うものなら、相手が気がついてないうちにその首は落ちてるだろう

あとこのように弟である俺と義妹になる優奈には甘い

「あつ、あの、彩歌さん！」

「ふふっ、大丈夫。優ちゃんから総くんを取ったりしないから。ねっ」

「あうう……」

「何やってるんですか、姉上。はやく食事にしましょう。優奈も行くぞ」

「ちよつとまってよ〜」

姉上と優奈が仲がいいのは正直嬉しい

真名を預けてるから、優奈のことを認めるといふことだしな

それに嫁いできた子と姉が仲が悪いなんて修羅場にならなくて済むということだ。というかこれが一番の本音

食卓に行くよ、まだ父上しかないなかった

「母上はまだですか？」

「さつき書庫に呼びに行つたからすぐくると思うよ。だから座つて待つていよう」

「わかりました」

俺たちは、夕食時だけは家族で食べることに決まつている

他の州や街に出向いていたりどうしてもという場合以外は基本集まる

それで今は母上待ちだ

「すみません、遅くなつてしまいました」

母上がようやく来る

司馬仲達、真名は母歌^{まいか}。俺の母上

あらゆる知識を持つていて、兵法、軍略から農作、商業と、とにかくなんでも知つて
いる天才だ

帝に学問を教えていたことから、教え方がとても上手くわかりやすい

今ではこの街を治めていて、それで収入を得ているそうだ

「それでは、集まつたことだし食べましようか」

『いただきます』

母上が一言いい、全員で感謝の気持ちを含めてそこから食事が始まる
楽しく、ということを考えてか食事してる時でも家族で話すことが多い

「総雅。あなた今日、白兕さんの鍛錬に遅れたそうですね」

「つ!?ゲホツゴホツ……母上、何故それを……」

「母親ですもの。息子のことはなんでもお見通しですよ」

隣の優奈に目を向けると、「違うよ!」とでも言わんばかりに首を横に振る

これは優奈が言ったわけでもなさそうだし、本当に母上が自身で気がついたんだ

「それでも、お休みの日以外毎日出てることは偉いです。一日で覚えようとするよりも

継続することが大事なのですよ」

「あ、ありがとうございます……」

今の俺はただやらなきゃいけないからやってるだけのものだ

だから本来褒められる筋合いはない

だから偉いと言われて罪悪感を覚えてしまった

勉強し、鍛錬も終え、ご飯も食べた

となるとあとはもう寝るだけだが、寝る前に少し本を読んでから寝るんだ

毎日毎日こんな繰り返し。何もしてないよりはマシだし、何も出来ない凡愚よりは十分いい

「あれ、総雅くんまだ起きてたの？」

「寝る前は本を少し読み進めてるからな。いつもは優奈が来る前に読むのやめてるし」
「そうなんだ」

俺は優奈と部屋を兼用している

なので部屋には寝台が二つあり、俺と優奈それぞれの分だ

着替えの時は俺が部屋から出れば問題ない

「じゃあもう寝るぞ。夜遅くまで起きてる理由が無いし」

「うん。じゃあおやすみ、総雅くん」

「ああ、おやすみ」

またいつもと変わらない一日が終わった

……飯の時疑っちゃったからな

明日は一日中休みだし、どこか好きな所に連れて行ってやるか

其ノ弐

朝、それなりに早い時間に目覚める

隣の寝台を見てみると優奈の姿はない

優奈は朝食の準備をしたりするため俺よりも早く起きている

部屋で着替え、顔を洗い、朝食を食べるに食卓へ行く

夕食は全員集まるが、朝食と昼食はバラバラだ

母上は書庫に籠ったり仕事したり、父上は農作を育てたり子どもたちに剣術を教えた
りしている

姉上は……わからない

「おはよう、総雅くん」

「ああ、おはよう」

優奈はいつも俺を待っていてくれて、俺と朝食を食べる

前に冷めてないかと聞いたら、どうやら優奈の分は俺のと合わせて作ってるらしく温かいご飯のままだから安心した

というかいつも合わせてるって手間暇かけてるよな

「優奈、今日は何か予定はあるか？」

「ううん。特にはないよ」

「そうか。じゃあ俺と街に行かないか？」

「総雅くんとお出かけ!? もちろん行くよ！」

「わかった。今日はなんでも買ってやるよ」

金ならそれなりにあるし、優奈にはいつもいろいろと助かってるつてのもあるからな
これぐらいは出さないよ

「なんでも買うつて総雅くんがお金出すつもり？」

「そりやそうだが」

「そんなの悪いよ。自分のものは自分で買うよ」

「いつものお礼みたいなものだから気にすんな」

「うーん……じゃあお互い半分ずつお金を出そ? そうすれば欲しいものたくさん買える
し」

「俺は別に全部出してやるけど、本当に半分ずつでいいの？」

「それにね、買ってもらうよりも一緒に買ったつていう方がわたしは嬉しいし、お互いが
出し合えばその分沢山使えるでしょ?」

確かにそれは優奈の言う通りだな

俺一人よりも優奈と二人ならより多く使えることになる

「でもね、わたしにとつて一番嬉しいのは、総雅さんと一緒にいられることだから」

「あ、ああ。俺もだよ」

優奈は……こういう恥ずかしがることを普通に言ってくるんだよなあ……

しかも本人は気づいてないし

「それじゃ準備できたら屋敷前で待っていてくれ。俺は母上に出かけることを言うてる」

「うん。じゃあ準備してくるねっ」

優奈はパタパタと走っていく

さて、俺も母上に報告しに行くか。といつても声色で心情を読み取れるらしいからわかるんだろうけど

朝から昼の間はだいたい書庫にいたことが多いから、書庫の部屋の前から声をかける
「母上、今よろしいですか？」

「構いませんよ」

「では失礼します」

許可をもらい、扉を開け書庫に入る

書庫にある机に本を重ね、母上は本を読んでいた

「どうしましたか？」

「今から優奈と街に出かけます」

「そうですか。ぜひ素敵な一日にしてきてくださいね」

「はい。それでは行ってまいります」

屋敷前に出ても優奈はまだ居ない

女の子の支度は時間がかかる時があるからな、それぐらいわかっているさ

「ごめんね、待たせちゃったね」

「気にすんなって。あれ、髪型変えたのか？」

優奈は普段髪の毛を後頭部でまとめ垂らしている髪型をしている

けれど今はまとめているのを一つじゃなく、二つにしている髪型になっている

「うん。どうか？」

「ああ、似合っている。可愛いと思うぞ」

「えへへ、ありがとう」

「さてと、それじゃ行くぞ」

手を差し出し、優奈は手を繋いでくる

いくら住んでいる街といつても俺たちはまだ子どもだ
はぐれたら大変だし、めんどくさい事になる

ならこうして手を繋いでいればはぐれることはない

「どこから行きたい？」

「服屋さんからでいい？前に気になった服があるんだよ」

「わかった」

服か。優奈はお洒落な物を着ててよく見栄えがあると思う
背伸びせずに自分に似合う物を着てるってのもあるな

「おや、司馬昭さま。今日は王元姫さまとお出かけですか？」

「おじさん。こんにちは」

「ああ。たまには街に出て一日過ごすのもいいかなって」

「今日は総雅くんから誘ってくれたんです」

「お、おい！優奈！」

「相変わらず仲が良さそうで。お二人の将来が楽しみですわ」

「俺たちはもう行く！街で問題があるならすぐに言ってくれよな！」

母上や姉上に知られるのは別にいいんだが、他の人に俺から誘っただなんて知られるとなんか恥ずかしい

だから逃げるようにしてそっから移動した

俺たち司馬一族は名族と言われてるが、そんなの関係なく街の人たちと接している盗人が出るなら俺でも捕まえるし、不満があるならその声を聞きすぐに改善したりしている

だからさっきの商人の親父さんともよく話したりしてる

「総くんに優ちゃん？」

「姉上？」

「もしかして二人つきりでお出かけかしら？」

「そうなんです。彩歌さんは？」

「私はちよっとお散歩中」

姉上が街に出て散歩？なんか珍しいな

でもやる事がなかったり、そういう気分になったりでもしたんだろ

「二人の邪魔しちや悪いからもう行くわね。次は三人で行きましょう？」

「はい！楽しみにしてますね！」

「私もよ。それからあまり遅くならないこと、いいわね？」

「ええ、わかつていますよ」

「ならよし！それじゃーね」

我が姉ながら本当に掴みどころのない人だ

あれでまだ大人じゃないんだからいろいろと怖い

あれから服屋で何着か買って、裝飾屋に行きお揃いの首飾りを買ったりした

あと姉上が街に出てた理由もわかった

どうやら散歩と言いつつ街を警邏してたらしく、一人盗人を捕まえたつて言うことを後から街の人から聞いたんだ

「通りすがりで颯爽と捕まえて行ったとか……姉上らしい」

「やっぱり彩歌さんはかっこいいよね」

「高すぎる壁だけだな……それよりお前はいつまでそれを見ているんだ」

「だって総雅くんとお揃いなんでもん」

「まあ喜んでるならそれでいいか」

今日は俺にとつても優奈にとつても楽しい一日になった

こんな日がいっまでも続いてくれればいいんだけどな

其ノ参

今日もまた勉強し、これから鍛錬だがその間に休憩ということで森の中で寝ている
今日は行きたくないという訳ではなく本当に休憩のつもりで来ている

「総雅くん、また怠けてる」

「怠けてない。この後の鍛錬に向けて体力を回復させてるんだ」

「本当かな？」

「本当だ。俺が優奈に嘘をつくわけないだろ」

「はあ……けどそこは本当だし、信じてあげましょう」

ため息をついたと思えば急に笑顔になる

コロコロ表情変わって面白いな

「十分休憩したし、そろそろ戻るか」

「うん」

起き上がり、屋敷に向かって歩こうとした時、少しだけ森の様子がおかしいことに気が
がついた

「……やけに静かじゃないか？」

「そう？動物たちの鳴き声がしてないからじゃないかな？」

「」

「待てっ、今何か音……いや、声が聞こえなかったか？」

「わたしは別に——」

「——ぞ」

「今のは？」

「うん、わたしも聞こえた」

ということとは俺の空耳じゃないってことだ

……誰かがこの森にいる？

一応この森には木の実やらいろいろと使える草が生えてたりするからそれを取りに

はいる人はいる

もしかしたらそういう人かもしれないが……

「俺は確認しに行く。優奈はどうする？」

「こんなこんな怖い時に一人にしないでよお！わたしも行く！」

「わかった。ならなるべく静かにな」

まだ誰かが喋っているのが聞こえる

それを頼りに、少しづつ近づいて行つた

近づくにつれて、会話が聞こえ始めてきた

「あの——司馬——だろ」

「殺せ——金——」

司馬つて言つたよな……

それに殺せ、金……誰かに雇われたとかか？

木に隠れ、遠目から姿を確認する

いかにも賊という存在で、数もそこまで多い程ではないが俺一人に対してだと少ないわけでもない

「めんどくせえな……優奈、父上を呼んできてくれ」

「総雅くんはどうするの？」

「ここで足止めする。あんな凡愚共には負けるつもりはねえよ」

「二人じゃ危ないよ！」

「けど俺が足止めしなきゃもしかしたらあいつらが街に先に入つちまう可能性もある。なら俺が足止めして、優奈が父上を呼べば街に被害がなく済む」

司馬の名前を出したつてことは母上が目的かもしれないし、街の人にも危害を加えない保証だつてない

「頼む。お前にしか出来ないんだ」

「……わかった。でも危なくなったら逃げてよね？」

「わかってるって」

優奈は走り出し、俺は気配を消しつつあいつらに近づいていく
駆け出して一気に近づける距離まできたら、先手を撃つ！

「せえやあ！」

一気に駆け出し、持っている木刀で頭に一撃畳み込む

上手い具合に当たり、そいつはその場に倒れる

「な、なんだ!？」

「餓鬼がなんでこんな所に！」

「凡愚共め……消えれば見逃すけど……」

「たかが餓鬼一人だ！痛い目見せてやれ！」

「そうなることは予測済みだ」

相手は単純に突っ込んでくるだけ

こんなもの、父上との鍛錬と比べたら全然だ

相手の動き、速さ、隙を確認したら、簡単に打ち込めるやつから倒していく

「こんな奴らに父上を呼ぶなんて必要なかったか……俺一人でも十分だ」

「調子に乗ってんじゃねえぞ！」

「単調な攻撃は見飽きた……っつて！」

「ぎゃあ！」

行動に隙がありすぎる

鍛錬中の父上から見た俺はこんな感じだったのか？

だとすると自分の弱さがわかっちゃう

どんなに手を伸ばしても姉上には届かないんだ……！

「うおおおおおっ！」

「それ以上動くんじゃねえ！」

「なっ……！！！」

違うところから声が聞こえたと思ったら、その賊共は予想もしていない最悪なことをしていた

「優奈あ！てめえ！」

「やっぱり知り合いだったか」

「優奈に触れてんじゃねえ！」

「そんな口聞いてていいのか？あ？」

気絶している優奈の首元に、短剣を突きつけてきやがった……

下手なことをしたら、優奈が……!」

「この女に傷つかせたくなかったら、わかるよな?」

「……チツ」

手に持っている木刀を投げ捨て、完全な無抵抗になる

それに少しの時間が経ったから、最初に気絶したやつからだんだん目を覚ましやがった

「じゃあ次はお前に痛い目にあつて貰うぜ?」

「簡単には殺さねえからなあ!」

「——がつ!」

顔を殴られ、腹を蹴られ、殴られ、蹴られ、ずっとその繰り返し

痛いなんてどうだっていい、ただ俺は、優奈を守れないのが……

「久々に楽しめたぜ。なあつ!」

「がはっ!——げほっげほっ……」

「そろそろ飽きてきたな——殺すか」

「ゆう……な……」

たかが賊……凡愚共に俺は殺されるのか?

こいつらに優奈を渡したまま死ぬのか?

嫌だ、そんなのは嫌だ。けどどうすることも……

「二人ともやつと見つけた。お姉ちゃん探したよ?」

「あね……うえ……?」

「あまりにもボロボロになっちゃって、帰ったら治療しないとね」

姉上はこいつらの事見えてないのか?

あまりにも無反応すぎるし、俺と優奈しか眼中に無いというか

「おつ?結構上玉じゃねえか」

「ちようどいい、この娘の前に楽しめそうだな!」

「……………」

「おい、何か反応したらどうだあ!」

「……………」

「女だからって痛めつけないと思う——」

「うるさいわね、静かにしてくれないかしら?ああ、死んでるのに何言っても意味無いわね」

「はっ。」

姉上に襲いかかろうとした賊は、姉上の発言の後、急に倒れた

そして倒れたと同時に、首が転がった

「あえて見ないようにしてたのに。私のかわいい優ちゃんに汚らしい手で触り、私の大好きな総くんを傷つけた」

「ひ、ひいー！」

「その代償は死。しかないわね」

姉上の言葉の終わりに、姉上の腰に下げてる剣から音が聞こえた

だがその剣は抜かれたようには見えなかった

そして賊が全員倒れ、同じように全員死んでいた

この人は……どこまで……強くなっている……んだ……

「痛うつー……ここは……」

見覚えのある天井に部屋、ここは俺と優奈の部屋

あの後姉上に助けられたってことか

右手に感触がある……見ると優奈と手を繋いでいた

優奈はまだ寝ていたが、捕まっていたよりも安らいでいる表情だ

「良かった……傷一つなさそうだ」

俺は彼女を守れなかった、何一つ出来なかった

愚か者は……俺の事じゃないか！

「もう起きて大丈夫なの？」

「姉上……申し訳ございません、俺は何もできませんでした……」

「そんなに自分を責めないで。あの凡愚共が優ちゃんを人質にするなんて姑息な手を使ったのが悪いのよ」

「ですが姉上はそんな状況でもいつものように対処なさった」

それにあの剣の速さ……目で捉えることすら出来ず、わかった時には相手は死んでいた

「総くん……」

「俺はもう、優奈を危険にしたくない……けどその力が——」

「その力ならすぐに手に入るわ」

「ほ、本当ですか!？」

「ええ。私たちの父上と母上はどれだけ凄いかわかってるでしょ？そして私たちはその二人の血を受け継いでいるの」

この大陸で最も強い父上に、天才的な知能を持つ母上

俺はその二人の血を受け継いでいる……

「私は一回でできちゃうけど、総くんは違う。むしろあなたは私とは逆で努力すればするほど、その才能が出てくるの」

「努力……確かに俺はそんなものをしてきませんでした」

「気がついたなら変われるわ。そしてあなたは優ちゃんを守れる力を、それ以上の力を手に入れられるの」

「……姉上、頼みがあるんですが」

「今から行くんでしょ？わかっている、一緒に行くわ」

体がボロボロだったから、姉上の肩を借りて父上たちのところへ行こうとしたら、後ろから服を掴まれた

「優奈！目が覚めたのか……！」

「ごめんね、わたしが捕まっちゃったりしたから総雅くんを傷つけちゃって……」

「馬鹿、そんなことはいいんだ。俺は優奈が無事ならそれでいい」

「でもそれじゃあわたしが嫌だよ。総雅くんが傷つくのは見たくないの」

「優奈……」

俺が鍛錬をちゃんとやっていればこうなることはなかったんだ

もう優奈に辛いことや悲しいことなんて起きさせたくない……!

「優奈、約束する。俺は父上や姉上のように強くなってみせる。そしてお前のことは絶対に守る」

「そろそろ行きましよう。優ちゃんはもう少し寝てなさい」

「待ってください!……わたしも行きます。わたしも今と同じままなんて嫌なんです!」

「やっぱり二人とも似てるわね。とりあえず二人とも行くってことでいいわね?」

俺と優奈は首を縦にふり、父上と母上がいる部屋まで行く

部屋にはもう父上と母上が居て、話し合う準備はできているようだった

「総雅、少しでも聞きたいのだけれど相手のことは何かわかるかい? 彩歌は一人も生き残りを出さなかったようだし」

「身なりはその通りに賊のようなものでした。しかし連中は司馬の姓に殺す、金という単語も口にしておりました」

「わたしも聞きました」

「そうか、総雅だけじゃなく優奈くんも聞いたとなると確実だな」

「はあ……あの愚かな連中は未だに愚かだったということですか。凡愚の極まりないですわね」

母上はため息を吐いて愚痴を言った

「どうやらこの件について何か知ってるんだ」

「母上は何を知っているのですか？ 総くんを傷つけた者共は皆殺しにしなれば」

「落ち着きなさい、彩歌。このことはわたくしが洛陽で空丹さまと白湯さまのお世話をなさつてた時から始まったものですね」

俺と姉上、優奈が本当にまだ幼い頃で洛陽にいた時期だ

母上は空丹と白湯のお世話をしていた

位はどこまで高いかは覚えてないが、もう少して相国になれたとか聞いたことはあつた

それでその母上をよく思っていない連中がいた

そいつらは十常侍と呼ばれ、なにか事あるごとに全て母上の責任になるように仕組まれた

母上は持ち前の知識で回避しきれたけど、その事に疲れ、腐敗しきつた国に絶望し引退した。そうして今この街にいる

つまり母上の推測によれば賊は十常侍が雇った者で母上、もしくは司馬一族全員の抹殺だったかもしれないと

「都から少ししか離れていないとはいえ、故郷で表舞台に立たなければ何もしてこま

と思っていましたか……このようなくだらぬことに巻き込んでしまい、皆さんには申し訳ないと思っています」

「私は構いません。誰が来ようが菌向かうなら殺せばいいだけですしね」

「次は捕らえて欲しいんだけどね。少しでも情報が必要なんだから」

「わかつてます。けれど家族に何かしようなら生かす価値もありませんけど」

姉上も父上も、もう次のことを考えてる

俺なんかは今のことを引きづってる……いや、今からでいい！今からでも変わるんだ

！

「父上！母上！」

「総雅？」

「あなたが荒声を上げるなんて珍しいですね。どうしましたか？」

「俺にまた一から学問と剣術を教えてください！もう俺は、何も出来ずに見てるだけなんて嫌なんです。だから優奈を、いや、全てを守る力が欲しいんです！」

「全てをですか。あなたはこの国の救世主にでもなるつもりですか？」

「望むのならそうにでもなります。ですが何かを変える、救うのならその分だけの力が必要です」

強者が弱者を虐げるのと同じように、強者しか弱者を守ることはできない

俺はもう弱者ではいたくない

「父上、母上。お願いします」

「わ、わたしにも教えてください！ 武術は無理でも勉強すれば総雅くんを支えられるはずですよ！」

「僕は構わないよ、むしろ嬉しいくらいだ。母歌もそうだろうか？」

「はい。あの総雅から言ってくくださるなんて。不謹慎ですがこの状況に感謝せねばなりませんね」

『ありがとうございます！』

俺と優奈は同時に礼を言う

もう前のようににはしない。今から頂点を目指してやる

「母上が学問で父上が剣術なら、私からは氣の扱い方を教えてあげる」

「氣……ですか？」

「うん。氣を扱えるかどうかでより強くなれるわ。これは優ちゃんにも教えてあげる。もしかしたら私が知らない使い方もできるかもしれないからね」

「は、はい！」

「わかりました。ご教授よろしくお願いします」

「でもまずは怪我を治してからですよ。万全な時に始めましょう」

こうして俺は一から全てを学ぶことになった
司馬一族の一人として世界を変えるために
そしてたった一人の大切な人を守るために

其ノ四

一から教わり始めてもう数年経った

父上と母上の才能はちゃんと受け継いでおり、学べば学ぶほど才を出していき、学問は母上の一歩手前まで及び劍術では――

「はっー！」

「うん、良い劍筋だ。本当にこの数年で強くなったよ」

「いつまで余裕でいられますかねー！」

あの時は手も足も出なかつたけど今は互角に戦っていた

父上の教えは厳しかったけどそれでも逃げず、飲み込むようにしてたからな

「これでも結構焦っているんだよ」

「そんな焦り全く感じませんけど」

「相手には心情を見せない、強さが同じぐらいなら尚更だよ。僕の場合は炎蓮とか相手だったからね」

父上の相手は次元が違ってたからな……

俺の場合は父上と姉上しか知らないわけだし

父上の攻撃は重いかではなく、ただひたすらに速い

本気で戦った時なんてその剣さばきが見えなかったほどで、鍛錬を積んできたから見えるようになった

氣も使えるらしいがそれがどんなものかはわからない

「さて、そろそろ終わりにしようか」

「わかりました。次で決めてみせます」

「そう簡単にはやらせないけどね」

剣を構え、父上に向かって走る

父上は目にも止まらない速さで剣を下ろす

けどその剣が振り下ろされるほんの僅かな一瞬、普通の人なら何が起きたかわからないほどの速さの中、背中に回り込む

お互い高速での戦いだが、その速さで背を捉えれば勝ちだ

「総雅の反射速度と思考は本当に自身の強さだよ。それと全てを見据える眼もある」

「父上が教えてくれましたからね」

「ちなみにあそこで振り下ろさなかつたらどうしてたんだい？」

「どのような行動をとってもそれに合わせられるようにしてました。だから賭けですが」

あの場では確実に父上に一本取れてましたよ」

「こちらに合わせてその裏をかくんじやどうしようもないか。でも本当に強くなつたよ」

俺は父上に勝てるようになった

まだ負ける時もあるがそれでも全敗という訳では無いし、勝てるようになってからは勝率は三割はいつてるだろう

……ただし姉上には全敗中

あの人は父上ですら勝てなくなり、まだ推測だがこの大陸で一番強いはず

「お二人共、お疲れさまです」

「おや、優奈くん。彩歌がもう呼んでるのかな？」

「はい、そろそろ終わる頃だからって。なのでお二人共回復させますね」

「僕はいいよ。この後はゆっくりできるからね。それじゃあ彩歌との鍛錬も頑張つて」

「はー！」

父上は疲れを一切感じさせずにその場から離れていった

「じゃあ総雅くん。回復させるね」

「ああ、頼む」

今からやるのは姉上との鍛錬で氣の扱いについてだ

俺は戦闘用に使えるが優奈は氣の扱いに長けていて、氣を流し込み体力や傷を治すことが出来る

書で氣をそのように使っている人達がいることを知り、戦えないからって頑張つて同じような使い方をできるようにしたんだだけ

確かその人たちを……五斗米道？だったっけ

「はい、おしまい」

「ありがとな、それじゃあ行くか」

「うん」

少し歩いたところで、ふと空を見上げた

特別な意味はなく、本当に偶然だったんだ

「流れ星か？こんな明るいうちに？」

「どうしたの？」

「いや、なんでもない」

俺が気にすることじゃないか

でもこれが不吉な事じゃなければいいんだが

「お待たせしました、姉上」

「ううん、大丈夫。優ちゃんもありがとうね」

「いえ。これぐらいお易い御用です」

「姉上、早速始めても？」

「私はいつでも構わないわ。総くんの好きな時に始めて」

姉上は剣を構えないけれどどこにも隙は存在してない

けれど別に勝つことが目的じゃない。認められるのが目標だ

俺は剣に氣を集め、姉上に攻撃を仕掛ける

それを当然のように姉上は攻撃を防ぐ

父上の一瞬の攻撃ですら直前で動きを変え、そこに攻撃をできたが、姉上相手だとその方法ですら通用しなかった

「日に日にちゃんと強くなってるわね。お姉ちゃん嬉しい」

「ぐっ……」

「さあ、総くんのその強さを私に見せて」

「はい！」

姉上は攻撃の速度、威力、思考、あらゆること全てにおいて俺よりも上だ

だから一箇所に攻撃しても通じるわけない

だから俺はある攻撃方法を考えた

「回り込もうとしても無駄。それじゃあ私に届かないわよ？」

「知ってますよ、そんなことくらい」

姉上に攻撃して、少しだけズレてまた攻撃

そうして円のように攻撃していき後ろに下がる

「下がった？何を考えてるのかしら？」

「それはこういうことです！」

剣に乗せた氣をその場で固定し、全方位から攻撃できるようになった今、その固定を

外し全て同時に斬撃を衝撃波のようにして飛ばす

これが俺の考えた氣の扱い方だ

姉上が気が付かなかったのは、空中に固定中は景色と同化し、飛ばす時に初めて見え

るようになるためだ

「斬った空中の箇所に氣を固定し、複数攻撃ね……考えはとても素晴らしいわ。それで

も私には届かない」

「なっ!？」

姉上は剣を地に突き刺し、周囲に氣を張り巡らせた

その氣の中にある俺の衝撃波はまるで時がゆっくりになったかのように動きが遅くなった

「これが私の使い方。何人で来ようと一人ずつ斬る為に考えたの」

この技はどう考えても俺の技とは相性が悪すぎる

もうちよつとだったのに届かなかつたか……

「全方位からの攻撃ね。それにもし防ぎきつても総くんの攻撃が続くだろうし、あなただけの戦い方を見つけたわね」

「でも姉上には届きませんでした。近づいていると思つたのにまた離されて……」

「私はお姉ちゃんなんでもん。かわいい弟に負けられないようにして、いつまでもかっこいいお姉ちゃんでないといね」

姉上はこちらに笑顔で語りかける

本当にいつまでも勝てないなあ

「でも優ちゃんには氣の扱い方は負けちゃつたわね。私は怪我を治すなんてできないもの」

「でもわたしは戦えません。だからそれ以外で総雅くんを支えられるようにしなくちゃつ

て思ったんです」

「総くんは優ちゃんを守り、優ちゃんは総くんを支える。ちゃんとお互いのことを考えた結果なったのよね」

俺が優奈を守る。けれど守るってことは戦わなくてはならなくて傷つくことになる

だからどうすればいいか悩んでたところ書物を見つけ今ののように傷を治すことが出来る気の扱い方を覚えただ

「もう二人に教えることもなくなっちゃったわね。あとはどれだけ自分で才能を伸ばせるかになるわ」

「ありがとうございます。姉上の教えがあつたから俺は強くなることが出来ました」

力は身につけた。誰にも負けないような力を

後はこの国が終わりに近づいているか見に行くべきか……

其ノ五

今日は休みだしどうするか……

旅に出る支度は大方終わってるし、後は母上から地図を借りてどこを回るか確認するだけだからな

警邏や情報集めるために、街の方に出てみるかな

「ん、優奈何やってるんだ？」

「今はお掃除してるよ。今日は風が強くて葉っぱが落ちてたりするからね」

「確かに今日は風が強いな」

別に風が強いのは珍しくもない

ただ……今日は何故か何かがありそうな気がする

そんな中優奈を一人にするわけにはいかないな

「じゃあ俺も手伝うよ」

「大丈夫だよ。それに司馬家の次男がやることじゃないでしょ？」

「家柄は関係ないさ。それにいずれ優奈だつて司馬家の一人になるんだし、そんなこと言えないぞ」

「じゃあ……手伝つてくれる?」

「ああ、任せろ」

今日は掃除を手伝うことにした

屋敷前は少し大きいし、一人でやるにしては大変だからな

それに掃除をすれば自身も磨かれるって聞いたことあるし、精進するのにちようどい
いだろう

「そういえば総雅くんは天の御遣いって知ってる?」

「なんだそれ」

「いま噂になつてるんだけど、天の国から見たことも無い着物を着てる御遣いさまが来て平和にしてくれるんだって」

「残念だったな優奈。この世に天の国なんてものは無い」

「そうなの?」

「ああ、これは姉上と気になつて考えたことなんだけどな。まあこういうことだ」

そこら辺の石を拾い、上に投げる

もちろん石は何も起こることなく落ちてくる

「石が落ちてきただけだよ?」

「そうだ。だつてこの地面、いや、それよりもつとずつと奥か。そつちに引つ張られて

るんだからな」

「どういふこと？」

「簡単な話だ。俺たち人間はもちろん、他の動物から物にいたるまでこの地面の奥底に引つ張られている。姉上と俺はこの力を重さの力であると思ひ、重力と名付けた。それで俺たちはこの地面に立つていられるんだ。だから天には国どころか物体は存在しない」

永久的に空中に浮かんでいられるものがあつたら推測は違ふが、空を飛べる鳥だつて永久に飛んでいられる訳じゃなく必ず地面や木々などこの引つ張られてる力に従つて下に降りるんだからな

「じゃああの雲とかは？いつも空にあるよ？」

「あれは実体がないものだからな。熱いものは湯気を出すだろ。あの湯気は触つても空中に消え触れられないだろ？あれと同じだ」

「いろんなこと思いつくんだね。じゃあ最後の質問。天の御遣いつてどういふことになるの？」

「御遣いはそのままの意味で人を表しているはず。天という空から落ちてくるとか、何かの比喩だな。考えられるのは過去か未来……見たことも無い着物つて言つてたから過去はないか。昔のことは書物に記されてるだろうから。となると未来か」

「そっか。未来から来た人なら過去の出来事であるわたしたちのことも知ってるもんね。だから平和にできちやうんだ」

「そうだろうな。きつと数十年どころじゃなく、百……いや千年は先の未来からかもしれないな」

こんなものは所詮推測だが、天の御遣いがどんな奴なのか気になるな
それにこの国……いや、世界にどれだけの影響を及ぼすのかもな

屋敷前は綺麗になり、完璧だ

これなら誰だって気持ちよく迎え入れられるだろう

「よし、こんなもんか」

「ありがとう、総雅くん。掃除も終わったからお茶にしようか」

「そうだな。せっかくだし優奈の作った肉まんが食べたいんだけど」

「いいけど時間がかかっちゃうよ？」

「別に今日はやることないからな、時間ならいくらでもある」

「そこまで言うなら仕方ないなあ」

屋敷に戻ろうとした時、ある人に呼び止められた

「失礼。ここが司馬仲達殿の屋敷であつてるかしら？」

振り向くと金髪の髪の毛をくるくるに巻いた少女に、護衛らしき女性が二人立っていた

……この子、とんでもない力を持っているな

「そうですが、母上に何か御用で？」

「母上？ということはあなたは仲達殿の〴〵子息で？」

「ええ、俺は司馬子上。こちらは王元姫。それであなたは？」

「私は曹孟徳。後ろにいるのは夏侯惇に夏侯淵よ」

曹孟徳……☒州の曹操だよな

確か州牧になった人のはずだが……そんな人が母上に何の用だ？

でも俺が用を聞く訳にはいかないし、母上に任せよう

「わかりました。まず部屋へ〴〵案内致します。優奈、おもてなしの用意を頼む」

「うん。では失礼します」

「それでは〴〵こちらへ」

優奈はおもてなしの用意をしに、俺は三人を客間まで案内する

この曹孟徳という少女、姉上に近いものを感じる

背後にいるだけで威圧を感じる

けどこういうのは父上相手にとつくになれた

「では、こちらでお待ちください。今母上を呼んで参ります」

「ええ、頼むわ」

この時間は書齋に籠ってるよな

普通なら外には出ないけど客人が来たとなれば出てくるだろうし、大丈夫だろう

早足で書齋まで行き、扉の前で声をかけようとするが母上の方から声をかけてきた

「どうしました？何か急いでいるようですが」

「母上、曹孟徳殿が母上にお会いしたいと」

「曹孟徳殿？……わかりました、すぐ支度致しますのでしばしお待ちを」

優奈 side

「失礼します。お茶をお持ちしました」

「ありがとう、いただきわ」

綺麗というか可愛いというか、とにかく見た目がいい人だなあ

確か曹操さんって宛州のお偉い方なんだよね？

わわっ、いつまでもここにいちゃ邪魔だよっ

「あなた、王元姫殿だったわね？」

「はっ、はい」

「そんなに畏まらなくていいわ。それよりあなたに聞きたいことがあるのだけれど」

「わっ、わたしで答えられるものでしたら」

やっぱりお偉い方と喋るってなると畏まっちゃうよ

苺歌さんや彩歌さんだってお偉い方だけど、家族だから普段から話せるし……これから慣れとかないと駄目だよ

「司馬一族というのはみんな才能の持ち主なのかしら？さっきの子上殿も相当な者に見えるわ」

「そうですね。仲達さまや春華さまはもちろんで総雅くん……じゃなかった、子上さんや姉の子元さまは両親の才能を受け継がれております」

「そう……子土殿だけさんで呼んでるってことは夫婦なのかしら？」

「えっ?! いや、それはまだで、いずれはなんですけど……あうう……」

でもいずれは祝言を挙げるんだよね

そしたらわたしと総雅くんは夫婦になるんだ

総雅くんは一人前になったらって言うてるけど、もう十分一人前だと思うけどなあ

「ふふっ、かわいらしいわね」

「華琳さま」

「わかっているわ。ただ彼女が緊張しているから解してあげようと思っただけよ」

「元姫殿、すまないな」

「いえ、おかげで緊張もなくなりました」

やっぱり上に立つ人って人の気持ちを読めるのかな？

苺歌さんにもいつも見透かされて支えられちゃってるし、曹操さんにも気を遣わせ

ちゃって……

あれ?もしかしてわたしがわかりやすいだけ!?

「お待たせしました。遅くなり申し訳ございません」

「いえ、王元姫殿と話させていただきましたので」

「そうでしたか。優奈さん、ありがとうございます。総雅が待っていますしこの場はも

「大丈夫ですよ」

「わかりました。ではわたしはこれで失礼します」

「ええ。機会があつたらまた話したいわね」

頭を下げて、お部屋を出る

ううゝ、緊張したゝ

総雅くんと一緒にいると落ち着くし、はやく総雅くんの所に行こつと

総雅 side

優奈が戻ってきたってことは、母上が話を始めたんだろう

「長かったな。何か話してたのか？」

「ちよつとからかわれちゃった。でもなんかお偉い人つて感じはしなかったかな」

「相手が優奈だからじゃないのか？それよりも厨房に行こうぜ。はやく優奈の作った肉

まんが食べたいんだ」

「はいはい。大人になってもこういう所は子供っぽいんだから」

当たり前だが、こういう風にするのは家族だけだ

それ以外の人には司馬一族の一人ということを自覚して振る舞う

さて、厨房に向かうと――

「ぼうぶんびぼうばん（総くんに優ちゃん）!?!」

「相変わらず肉まんが大好きですな姉上」

母上が作ったのか、姉上が肉まんを一人で頬張っていた

まさか俺たちが来るとは思っていなかったのか、口の中に詰め込みながら喋ったんだ

「んっ……。ちっ、違うの!全部一人で食べるつもりじゃなかったんだけど食べ始めた

ら止まらなくなったというか!」

「別に構いませんよ。俺は優奈に作ってもらおうので」

「優ちゃんの手作り!私も食べたいな……。だめ?」

「あんまり食べすぎはよくありませんよ?なのでひとつだけいいのでしたら」

「ひとつでも十分よ。お願いね」

姉上は大の肉まん好きだ

特に母上の作ったものか優奈の作ったものが

ちなみに優奈は母上から作り方を教わったから母上が考えた司馬家秘伝の肉まんの

料理方法を知っている

「そういえば母上は書齋にいなかったけれど、どうしたのかしら？」

「今客人と合っているんですよね。宛州の曹操殿です」

「へえ……だから客間から面白い気配がしたのね」

「面白い……ですか？」

「例えるなら……心の底から屈服させて可愛がつてあげたいとか？」

背筋がゾツとした……

多分冗談でもなんでもなく、やろうと思えば本気でやりかねないはず

敵ではなく、姉弟で良かった……

「いい匂いがするかと思えば、優奈さんが作ってらしてるのですね」

「もうお話は終わったのですか？」

「はい。先程お帰りになされましたよ」

「なんの話をしたかのお聞きになさっても？」

「わたくしに仕官して欲しいとの事でした。もちろん丁重にお断り致しましたよ」

曹操殿が来たのは初めてだが、仕官の話が来たのは初めてではない

母上はたくさんの人から仕官して欲しいと来たが、全て断っている

「やはり誰にも使える気はないのですか？」

「わたくしはもう表舞台から引退した身です。ですがそうですね……あなたたちが旗揚げをするのなら、支えるつもりではありませんよ」

「まさかご冗談を」

「冗談かどうかはあなたたち次第ですよ」

俺か姉上が……いや、まさかな

それに乱世になって姉上が戦うことになったら誰も勝てるわけがない

「この話はここままでしておくとして……彩歌。あなたいくつ食べました？総雅と優奈さんの分もあったから少なくとも五個以上はあったのですが」

「……私が全部食べました」

「素直でよろしいです。では今日の分はもう終わりですね」

「そんなっ?!母上それはあんまりです!」

いや、母上と優奈だけは姉上に勝てるな

しかも戦わずに一方的に

「やっぱり司馬家で一番強い人って母歌さんなのかな?」

「ああ。母上には勝てない」

「優奈さん、あまり彩歌を甘やかしてはいけませんからね?」

「は、はい」

その後、姉上はとんでもなく落ち込んでいた

まあ優奈が残しておいた最後の一個の肉まんを食べた時にはまるで生き返ったかの
ように喜んでいただけ

それにしても宛州の州牧、曹孟徳……か

やはり外にはまだ知らないことがあるようだな

其ノ六

「忘れ物はないな？」

「うん。準備完了だよ！」

「ほ、本当に準備出来てるのよね？お金は足りてる？ああお姉ちゃん心配だよ」

「姉上……」

どれだけ心配性なんだ

少し旅に出るっただけですつと離れるっわけじゃないのに

「だ、大丈夫ですよ彩歌さん。それに旅が終わればちゃんと帰ってきますし」

「本当よね？お姉ちゃんを一人にしない？」

「母上と父上がいるではありませんか」

「彩歌はそろそろ弟離れしないとね」

「嫌です！そんなことしたら死んでしまいます！」

完全無欠の姉上の弱点が弟と義妹だなんてな……

少し出る間姉上は大丈夫なのか？

「彩歌の心配はいりませんよ。それよりこの国がどうなっているのかしつかりと自分の

目で見てきてください」

「はい、もちろんです。それと馬に資金まで用意してもらってありがとうございます」

「そうそう、僕からはこれを。この先賊だつて出てくるはずだろうし木刀じゃ物足りないからね」

「ありがとうございます、父上」

地図、資金、飲水、馬に剣

旅をするのに十分すぎるほどに整った

あとはぐずつてる姉上をどうするかだけ……

「彩歌。わたくしたちと留守番をしていれば、今よりも成長した総雅を見られるのですよ？」

「うっ……」

「それに総雅の帰る場所としていられるのです。これ以上何が不満が？」

「わかりました……なら私が総くんと優ちゃんの帰る場所を守ります！」

さすが母上。姉上の使い方が分かっていらつしやる

きつと父上も母上には頭が上がらないんだろうな

仲良くてイチャイチャしてるのはわかるけど

「それではそろそろ出発します」

「あなたの成長になると信じてます」

「世間を見る旅でも正しいと思つた行動をするんだよ」

「ちゃんと帰つてきてよね？お姉ちゃんとの約束よ」

「わかつてますよ。それじゃ行こう、優奈」

「うん。それでは行つてきます」

俺と優奈は、家族に挨拶をしてこの国がどのようになっていくか見るための旅に出るため、馬を歩かせた

俺と優奈、共に初めてこの街と洛陽からの遠出になるんだ

街道を歩いているが、商人や旅人とは遭遇しない

やはり治安が悪いからか、みんな極秘の安全な道を行っているんだろうか

「それにしても、こうして二人だけっていうのも随分と久しぶりだな」

「いつもは彩歌さんがいたからね」

「気持ちにはわかってくれて二人だけの時にしてくれるんだが、耐えられなくなつて戻つてくるからな」

「でもとても好きつて気持ち伝わつてくるのは嬉しいな」

確かに、姉上は十分すぎるほどに俺たちのことが好きつて伝わつてくる

正直言うとう度が過ぎるんじゃないかと思つて思うが、好意を持たれて嫌がるなんてのはない

「ねえ総雅くん。まずはどこに行くの？都からは離れちゃつてるけど」

「まずは幽州に行き、曹操殿が治めてる陳留に行く。そこからは北に行き幽州に行つたら南に向う予定だ」

「西の方には行かないの？」

「益州や荊州の評判は確認するまでもない。涼州は馬騰殿がいるからな。父上が手紙のやり取りでどうなつていいのか聞いたところ異民族の襲撃に備えたりで忙しいだろう。邪魔するわけにはいかない」

政をしつつ、異民族に備えるなんて想像するまでもなくめんどくせえことだ

しかも馬騰殿は父上と同等に戦える人、もし目をつけられたらそれこそめんどくせ

「都には行くんだよね？賈充さんがいるんだし」

「ああ、あいつは向こうで仕事をしてるからな。その時に洛陽でどうなつてゐるか、空丹

たちのことについてもわかるだろ」

洛陽には俺の友人、賈充がいる

「隠密に優れ、裏の裏のことまで知り尽くしてるからほぼ全ての情報が得られるだろう
「まだまだ州まで遠いとはいえ、あまり時間をかけたくないしな。少しだけ走らせる
か——」

「そこの二人待ちな！」

何人かが街道の真ん中に立ち塞がる

身なりからして……賊か

「何の用だ。俺達は急いでいるんだ」

「上質な服を着てやがるからどつかのお坊ちゃんとお嬢ちゃんか？荷物全部置いてけ
！」

「はあ……めんどくせ」

仕方ないから相手するため馬から降りる

この時点でもうやる気がしない

「優奈、すぐ終わらせるから乗ったままでいろよ」

「うん。あんまりやり過ぎないようにね？」

「わかってるって。……ほら、荷物が欲しいんなら俺を殺してからしろ」

「命知らずとはこのことだな、やっちまえー！」

賊の頭？らしきやつが号令したあと、周りの手下共が全員束になってこつちに向かつてくる

十……二十ぐらいか？どつからそんなに人を集められたんだか

だが人数は関係ない。素早く剣を振り鞘に収める

「峰打ちだから死んじやあいないさ。これに懲りたら賊なんてやめろよ」

「はあ？何言つて……」

そりや何言つてるかわからないか

だつてあいつらから見たら俺は剣を一振りしかしなかつたんだから

言葉を発してる時に気絶したんだから、このことは覚えてないかもな

「お疲れ様。今のすごかつたよ」

「本気の姉上と父上と戦つてたんだ。あれぐらいできて普通だ」

「ねえ、この人たちここに寝かしちやつてていいのかな？もし起きたらまた誰か襲つちやうかも」

「何も出来ないようにちゃんと武器も壊したさ」

さつき気絶させるとき、同時に手に持つてた凶器となるものは全て壊しておいた格下と戦い、何も出来なくさせるにはこれが有効だ

全てが終わったから、また馬に跨る

「さて、そろそろ行くか」

「うん」

これで街道をあまり使わない理由が完全にわかった

これからは賊と戦いつつ先に行かなきゃならないのか……めんどくせ
けれど優奈を守らなきゃならないんだ、そこは本気だぜ

其ノ七

街を出てそれなりの時間が過ぎている

確かもう宛州には入っているからもう時期陳留に着くだろう

「そろそろ村とか見えないと野宿することになるな……」

「宛州に入ってから賊は減ったけど、夜は危ないからね。この子たち少し早く進ませる？」

「その方がいいかもしれないな」

少しだけ進行速度を速め、道を進む

日が沈み始めて来たから人通りも無さそうだ

これはもう諦めるしかないか？

「総雅くん。あそこに人がいない？」

「あれ？」

優奈が指さす方を見る

確かに誰か歩いているな……

「もしかしたら村人かもしれないな。近づいて話してみよう」

「うん。村が近くにあるだけでも安心できるしね」

なるべく驚かせないように、馬は早足のままで進みその人影に近づくなにか小さい子のような気が？

「すまない、少しいいか？」

「……………？」

本当に子供だった

背中にまで届く長い白い髪の毛が特徴だな

「この辺りで村とか街はないか？」

「……………」

「私たち旅してるの。それで今日休めれる所を探してるんだけど……………」

「一晩だけでいい、もちろん礼はする。寝所を貸してくれないか？」

「……………うん」

言葉話すのが苦手なのか？

ただこれで少しばかりの希望は持てそうだな

俺は野宿は別にいいんだが、優奈に悪いと思う

だからなるべく安全な所で休めれるようにしないと

「いい……だつて……」

「ありがとう、助かったよ。ええつと……」

「……文鴛……」

「文鴛か、ありがとうな俺は司馬昭だ」

「わたしは王元姫。よろしくね」

「……よろしく、ね」

そういやまだ夕飯は食べてなかったな

今更になつて空腹感も出てきた

「ご飯……食べよ？」

「いいのか？ 何から何まですまないな。優奈、手伝つてあげられるか？ 俺は少し村長と話したいことがある」

「家事はできるから大丈夫だよ。お手伝いするね」

「ご飯については優奈に任せて、俺は情報収集をする」

それに優奈は誰にでも優しいからな、この子も懐くだろう

村人に聞き、村長の所に案内してもらい、話を始める

「急に尋ねてしまい、申し訳ございません」

「いえ、それにしてもまさか司馬懿さまのご子息さまとは」

「母上をご存知で？」

「それはもう。あの方が都で務めていた頃はこの村ですら暮らすのが楽でした」

母上はどれだけの善政を行ってたんだろう

当時子供だった俺にはわからなかったけど、今の俺ならその凄さがわかる

「しかし、仲達さまがご隠居なされては税が重くなり、暮らしていくのがやつとでごさいます……」

「そのような中で来てしまったとは……申し訳ない」

「司馬昭さまに謝罪してもらおうなど！そのお心だけで十分です。それに今の州牧さまのおかげでだいぶ暮らしやすくなりました」

曹操殿は俺とは違い、少しでも自分が治めている人の暮らしを良くしていつてる

俺には何ができるんだ？

母上が治めていた国がここまで腐りかかっている

そんな世を俺が正すことができるのか？

「おじーちゃん」

「光^{こう}や。どうしたんだい？」

「ご飯できた、よ？」

「そうかい、教えてくれてありがとう。すぐ向かうから向こうで待っていておくれ」
「……わかった」

「文鴛はお孫さんですか？」

「いいえ、あの子は引き取っておるのです」

引き取って……か

だから血の繋がりのようなものを感じなかったんだろう

「あの子の母は早くに亡くなり、父は武芸者で食客として雇われておるのです」

「荒事が起きる危険性があるから村に置いてったと？」

「我々もそう捉えております。だからわしがあの子を引き取りました。しかしあの子も父の血を受け継いでか、武芸に長けておりました……」

まだ幼い子供にしか見えないが……

きつと才能に恵まれていたんだ

「さつ、むしろそろそろ向かいましようぞ」

「そうですね。いろいろお聞きできて助かりました」

「ご飯も食べ、あとは寝るだけになったら地図を広げこの先を確認する

「この村がここだから、朝早く出れば日が沈み始める頃か一日置いての朝に陳留に着きそうだな」

「じゃあもうちよつとで最初の目的地だね」

「ああ。曹操殿が治めている街だ、他のところとは違いそうだな」

姉上に近い気配を持った人だ

そんな人が治めてるからきつと良い街なんだろう

「あれ？文鴛ちゃん？」

「ん？」

優奈が文鴛の名前を呼んだから振り返ってみたら、部屋の入口に文鴛が立っていた

「旅の……話？」

「うん、そうだよ」

「何で旅してる……の?」

「この国がどうなっているか、少しでも自分の目で確かめてみたいと思ったんだ」

「昭さまは……すごい、ね」

「凄くなんかないさ。まだ何も変えてないんだから」

「でも……やろうとしてる……」

普通なら国を変えるなんて馬鹿げてると思われるかもしれないことを、この子は凄
いつて褒めてくれるのか

いつもは司馬一族だからなんでも出来る、優秀な姉上の弟とかつて認識されることが
多かったけど、俺のことを褒めてくれたのって家族以外だとこの子が初めてかもな

「ありがとな、文鳶。ちよつとだけ気が楽になった」

「私もね、褒められたんだよ?お料理上手って」

「確かに優奈は料理上手だからな」

「ありがと。これからも美味しいものたくさん作つたげる」

「楽しみにしてる」

こんな荒れた時代での唯一の楽しみでもあるからな

好きな子の手料理をずっと食べられてるなんて贅沢なんだろう

「…………ふあ…………」

「眠いのか？」

「……ん」

「もしかしてここに来たのって、一緒に寝たいんじゃないのかな？」

「……うん」

「そうか、じゃあ三人で寝るか」

もう限界なのか目を擦りながらとぼとぼ歩き、俺と優奈の間に文鳶が入ってくる
そしたらあつという間に眠ってしまった

才能に恵まれてると言うが、こう見れば幼い子供にしか見えないな

「じゃあわたしたちも寝よっか」

「そうだな。陳留まであと少し、そこに着けば少しはゆつくりできるから頑張ってくれ」

「わたしは大丈夫。総雅くんが隣にいるならずと頑張れるよ」

「そうだな。俺もお前がいれば何とかかな。だから……ずつと隣にいてくれよな」

「うん」

次の日の朝、身支度を整え出発の時刻となった

「一晩泊めていただき、ありがとうございます」

「いえ、我らも司馬昭さまのお役に立てて嬉しゅうございます」

「ではこれで。俺も母上が成したようにこの世を正してみせます」

優奈と一礼し、馬にまたがろうとしたとき服を掴まれた

「ん？文鴛？」

「もう……行っちゃう……？」

「ああ。俺たちにはやらなきやいけない事があるからな」

「……（ふるふる）」

行くのを止めようとしてるのか？

一歩歩こうとすると力いっぱい握られる

もちろん相手はまだ小さい女の子だから振り切れるが、そんな荒い行動はしたくない

さて、どうしたものか

「あの、司馬昭さま」

「すみません、どうにかするから少しだけ……」

「その子のことなのですが、もし司馬昭さまたちが良ければその子を持って行ってくだ

さいませんか？お二人に懐いているようですし、それに何よりその子にはこの村にいるよりもこの大陸を旅させた方がよろしいと思うのです」

「俺たちは構わないが……文鴛、君はどうしたい？」

「お二人と行く……行つてみたい」

その時のこの子の眼はさつきまでの女の子のような可憐な眼じゃなく、決意に満ちた眼をしていた

「この子がここまでして一緒に行きたいと決めたんだけ、断るなんてことは出来ない

「この旅は決して安全なものじゃなく常に危険が伴っている。俺が守つてやるけどそれでも無理な時だつてある。それだけはわかつてくれ」

「わたし、強いから……大丈夫」

「そうか、なら心配いらぬな。……村長、この子は責任もつて俺たちが預かります」

「司馬昭さまならきつとその子を成長させてくれるでしょう。すみませぬがもう少々お待ちいただけますか？」

そう言うのと、村長は村人に何か言つて走らせた

先程走つた村人が戻つてきたらその手には槍が握られていた

「これはお前の父親がはずれと置いていったものだ。これを使いなさい」

「うん……ありがと、おじーちゃん」

「そろそろ行くが、もう別れはすませたか？」

「……大丈夫」

「それじゃ出発しよっか。文鳶ちゃんはわたしの馬に乗ろっ」

「……光」

「確か文鳶の真名だったよな。呼んでもいいのか？」

「昭さまと……元姫さまになら、いいよ」

「わかった。なら俺の真名は総雅だ。これからよろしくな、光」

「わたしは優奈。よろしくね、光ちゃん」

「総さまに、優さま……よろしく、ね」

俺たちの旅に、光が加わった。これから賑やかになりそうだな

次はいよいよ陳留だ。あの曹操殿が治めてる街、きつと今まで見てきた街よりも平和だろうな

其ノ八

村を出てもうかなりの時間が経ち、もうすぐ日が暮れそうだ

だが地図から進んだ距離を考えると本当にもうすぐで陳留に着くが、今は見晴らしのいい草原ではなく、木々がそれなりの森の中だから夜になったら道も暗くわからなくなる

ここは一晩だけ野宿をした方がよさそうだな

「……じゃあ、総さまはお偉い人……になるの？」

「名門だけあって凄いなだよ。苺歌さん、えつと司馬懿さんはお綺麗で何でも知ってるし、まさに名門って感じがしてね。それとわたしにとつてもお母様って思えるほど優しいんだ」

「……すごい。……わたしも、会ってみたい」

「この旅が終わればお屋敷に戻るし、その時にみんなに紹介するね」

「ん？母上の話か？」

「うん。光ちゃんがわたし達の事聞いてきたからね」

「まだ俺達は出会って間もないから知らないこと多いからな。ゆっくり出来るようになつたらいろいろ話そうな」

「……(うんうん)」

うんうんと頷く光

なんかまるで小動物みたいな子だよな

姉上はこういう子に優しいいきつと気に入るだろう

母上は容赦ない時は怖いけど、普段はとても優しいし、父上はまず怒ったところ見たことないから、この子が家に来てもきつとみんな歓迎してくれるだろう

「それより二人とも、あともう少しの所まで来たんだが、もう日も暮れてきた。申し訳ないがここらで野宿になってしまうが構わないか？」

「わたしはもう何度も経験してるから大丈夫。光ちゃんは？」

「……わたしも大丈夫」

「そうか、ありがとう。陳留に着いたら存分にゆっくりしていいから今は我慢してくれ」

さて、あまり暗くなってきたから準備しても効率が悪い

いくら外でといつても、少しでも休めるようにするには早めの行動が肝心だな

「——誰だ」

周囲から気配を感じる

これは動物ではなく、人間でしかも俺達を的確に狙ってるものだ

「ちつ！もう少しで休んでる最中に襲えたつてのになあ！」

ここいらを縄張りしている賊か？

早めに休もうとしたのは早計だったか……

ん？こいつら……一人残らず全員黄色い布を身につけてやがる

こいつら仲間ってことを認識するための物か？

それはどうでもいい、とりあえずこいつらのようなやつがまだ近くにいるかもしれない

い

ここはさっさと終わらせて陳留まで行った方が安全か

「優奈、馬に乗ってろ。蹴散らした後早急に陳留に向かうぞ」

「うん……って光ちゃん!？」

劍を鞘から抜き、賊と見据えている時、優奈の声がした

どうやら光が馬から降りたらしいな

「光、馬に乗ってろ」

「総さま……わたしがやる、よ？」

「光ちゃん!?!ここは総雅くん任せれば大丈夫だから!」

確かに、この子は強い

でもまだ実際に見たわけじゃないからどれほどのものかわからない

相手がこの子よりも下とはいえ、少しの動きを見れば分かるだろう

「木もあるし、槍だとやりづらいぞ？」

「……へーき」

「ならせつかくだしどれぐらい強いのか見せてくれ」

「……うん」

この場は光に任せ、俺は優奈の所まで下がる

さて、どのぐらいの力があるかお手並み拝見だな

「なんだ？このガキが俺らをやろうってのか？」

自分と相手の力量も比べられないのか

愚かなものだな

「……やるよ」

光はそう呟き、思い切り踏み込み間合いを詰めて一突きする

あまりにも近すぎず、かと言って離れすぎずといった適切な距離を一瞬で見定めたか
そして自身が狙った箇所には正確に狙いを突いている

「このガキ！」

「えいつ」

森で木々が邪魔になるというのに、槍をまるで身体の一部のように扱っている

一振りの攻撃で一度に数人を薙ぎ払い、その槍捌きはまさに一人の武人としてのもの

だな

瞬く間に数十人といった賊共を蹴散らしていた

「それに全員生かしている……か」

「光ちゃんとっても強いね……」

「ああ」

親譲りの才能があり、自己流でここまで強くなつたんだろう

だから光に足りないのは経験と指導者といったところか

これは父上か姉上に指導してもらえれば相当なものになるな

「総さま……終わつた、よ？」

「よくやつたな。偉いぞ」

「うん」

頭を撫でてやると喜んでるのがわかる

尻尾が付いたら子犬のようにブンブン振っているだろうな

「戦つた後ですまないが、すぐここを抜けるぞ。もしこいつらの仲間がまだいたら休まるものも休まらないからな」

「……(ハハハハハハ)」

その後俺たちは早馬で駆け、無事に陳留に着き幸いなことに宿もすぐ見つけられた
ゆつくり休めたのは久しぶりだな

「本当に数日ゆつくりしてていいの？」

「ああ。視察はするが、せつかくだからな。視察するのは俺だけでいいから二人は遊ん
できたりしていいぞ」

「そういう訳にはいかないよ。わたしたちも一緒に行く。ねっ、光ちゃん」

「……総さまと優さまといたい」

「二人がそういうならいいが」

俺自身、優奈と一緒にいられるのは嬉しいと思うし、光ともっと仲良くやっていき
たいしな

この視察を言い訳に少し羽を伸ばすとするか

「それじゃあまずはどこから行こつか」

「この街をなるべく広範囲で動けるのなら、俺はどこでも構わない」

「総さまと優さまに任せる、ね」

「それじゃあ、光ちゃんの服とか身支度を整えよつか」

「……えっ?」

「そうだな。それと水と日持ちする食料で後は次の街まで残しておくか」

食べ物意外と果物や軽いものでも何とかなるけども水だけはそうはいかない

けれども飲水をあまりにも長く置いておくのも身体に悪いものだからなかなか難しいものだ

「あ、あの……」

「どうした?」

「……わたしより、総さまと、優さま優先……にして」

「俺は今あるもので十分だから気にしなくていい」

「わたしもだよ。それより光ちゃんのためにいろいろしてあげたいんだ。自分の贅沢より家族の幸せだよ」

「家族……」

「俺達はそうありたいと思うが、光はどうだ？」

「……すごく、嬉しい……！」

気持ちは同じようだな

すごく嬉しそうに、目を輝かせているのがわかる

さすがにこれで困惑されたり拒否されたりでもしたらどうしようか困ったものだった

「じゃあ行こっか。最初は服からかな？戦ってもいいように丈夫で動きやすく、でも女の子らしさがわかる服とかないな」

「そんな服があるのか……？それより優奈も欲しいものがあれば買っていいんだぞ」

「ううん、そういうわけにはいかないよ。子どもの頃は欲しいものはすぐ欲しいなんて思ってるけど、今は何にどう使うべきかわかってるよ。それに、わたしにはこれがあるから」

あれは子どもの頃に買ったお揃いの首飾り

さすがに成長したからそのままは無理だったから長さを調整してもらい、今でも俺と優奈は首につけている

「そう言ってくれるなら、俺はいいよ。でもまず服屋を探さないと」

「来たばかりだからまだ街の中もわからないし、聞いてみよっか。あつ、ちようどいい

人が。すみませーん」

「はい。何でしょう?」

優奈が声をかけたのは、白い服を来た俺と同年代ぐらいの男性だ

「私たちこの街に来たばかりなんですけど、この子向けの丈夫で動きやすい服が売ってる場所知ってますか?」

「お、おい。女の子用の服探してるのにいくらなんでも男性に聞いてもわかるわけ——」
「大丈夫です、知ってますよ。俺、警備隊に入ってるのでよく道とか聞かれますので」

「——そうでしたか。ならお願いしてもよろしいですか?」

「はい。案内しますね」

優奈はどんな場合の例外もなく、人を見る目がある

街でもどの人が才に優れていたか、見分けが付き、そこは母上と姉上もとても評価していたほどだ

今回もまあ……それが役に立った……のか?

それにしても移動しつつこの街を見渡しているが、とても政が上手くいつてるのが伝わる

街が賑わっている。だから経済が回っていることも示している

これが曹操殿の力……ってことか

「それにしても女性向けの服屋を知ってたりと、警邏以外にも忙しそうですね」

「警備隊はそうでもないんですけど、城の方は女性が多くて。それでみんなの対応をしなければいけませんし。それにあなたがたのようにこの街に慣れてない人達にすぐ案内できるようにしておかなければいけませんしね」

「城の方……確かに曹操殿とその配下の二人も女性だったな」

「もしかして華琳のお知り合いで？」

「いや、俺の母上を訪ねに参られたんですよ。司馬仲達と言えばわかると思いますが」

「司馬仲達!？」

「ご存知でしたか」

「は、はい。……ああ、ここのお店だ」

到着したのはそれなりに大きい店

確かにここならそれなりの種類はあるし、光に似合う服なんかはたくさんありそうだな

「それじゃあ俺はここで」

「ええ。ありがとうございます」

……なるほど、曹操殿が手に入れられたか

「どうしたの？ 総雅くん」

「優奈の感じたことでもいい、さっきの人どう思った」

「えっ？えーつと、わたしにもよくわからなかったかな」

「どういう事だ？」

「人を見ればね、この人はこれをやれば上手くいくんじゃないかなとか、これをやれば成長するとかつていうのが何となくわかるんだけどさっきの人はそれが分からなかったんだ」

「そうか。ならほぼ確信したな。……さっきの男が天の御使いつてやつだ」

「ええっ!!」

「……天の御使い？」

「光は知らなかったか。今日の御使いが来て平和にしてくれろとか、そんな噂が流行ってるんだ。それで俺はあいつが天の御使いだと思っただけのこと」

「まだ少し話しただけで、何ができるか、どれほど強いのかは全くわからないけど、本当にあんなやつが今のこの漢の国を平和にできるのか？」

「これだったら姉上や母上の方ができると思うが……」

「……総さまの御家族の方が……平和にできる」

「うん、わたしもそう思う。司馬一族は実力だって、名だつて知られてるもん。それより総雅くんはどうしてあの人を天の御使いつてのがわかったの？」

「そうだな。まずは警備隊の人なのに城の内情を知っていた。多少は城の中に入ること
はあつても何か特別そうだったからな。次に曹操殿を真名で呼んだことだ女性が主に
上にいるこの国で、男性が女性の君主を真名で呼ぶなんて將軍や身分が上人ぐらいだ
しな。最後に母上の名前を出した時の異常な驚き用だ」

母上の名は大陸中で知れ渡つてるほどだから、もし曹操殿と知り合いでも納得いくだ
ろうし、少しは驚いたとしても、そこまではいかなはず

なのにあいつは相当驚いた。それも何故ここで司馬仲達という名前が？みたいな反
応とも見れた

「それと噂だと見たこともない着物を着てるんだったよな？ 少なくとも俺は見たことが
なかった。母上が書き記した各国の詳細が載つてる本を見たけどもあんなものは載つ
てなかったしな」

「……それで、このことは苺歌さんや彩歌さんに報告するの？」

「ああ。だけど曹操殿の下にいるつてことは少なくとも悪用されることは無い。だから
屋敷に戻つてからだな。さてと、そろそろ光の服選んでやろうぜ」

「そうだね！ わたしが光ちゃんを可愛くしてみせるから！」

「……よろしく……お願いします」

あの後無事にお目当ての服が見つかった……のはいいが、それを見つかるまでに光は何度も試着され続けた

その結果――

「すう……すう……」

着せ替え人形にされて慣れてない疲れが溜まったんだろう

宿に着くなりすぐに寝台に横になって寝てしまった

「全く、光はまだこういうことに慣れてないんだからな。次からは気をつけろよ」

「つい光ちゃんが可愛くて……」

「まっ、自覚してる分にはまだいいか」

「それで明日はどう回るの？」

「そうだな。今日で大通りの事はわかったし、明日は少しだけ適当に回ったら少し人が

少ない方を回るか」

やはり実際にこの目で見てみるのでは得られるものが違う

それに才ある者が納める街はどこも街として成り立っている

今は母上と曹操殿が納めている街しか見ていないから何とも言えないが、全てがこうではなく、むしろ無能が納めている所もある……いや、それが多いからこの国は終わりに近づいているんだ

それを止めるには……俺だけじゃあ無理だ

屋敷に戻る時には考えがまとまっていればいいけどな